

少年院とその周辺

—施設収容を経験する人々の語りを事例として—

都島 梨紗(名古屋大学大学院)

1. 問題設定

本報告の目的は、少年院収容を経験した元非行少年による視点から、少年院における、非行少年への「管理」のテクノロジーを整理することである。

少年院は、非行少年を施設に収容するという目的とともに、少年の心身の健全育成を目的とし、犯罪リスク削減を目指す施設である。そのために、少年院では矯正教育を実施している。

このような目的を掲げる少年院は、犯罪リスクの「管理」という視点から言えば、少年を社会から切り離すことで社会秩序の「管理」をし、少年自身に対し教育を施すことで少年の自己の「管理」をする。つまり少年院は、二重の「管理」構造を持つ施設として、捉えなおすことが可能なのである。

本報告では、少年院を、二重の「管理」構造を有することで、犯罪リスクに対峙してきた施設として位置付ける。そのうえで、少年院における「管理」のテクノロジーとしての矯正教育について整理を試みる。

2. 少年院における「管理」

犯罪リスクを「管理」するテクノロジーとしての少年院教育、という視点から、少年院教育に関する先行研究を検討すると、大きく2つに分類することができる。例えば広田他(2009)や古賀(2009)は、少年院の集団指導や教育評価を題材に、少年が収容されている施設内の教育環境を「管理」するテクノロジーについて明らかにしている。

また、稲葉(2009)や仲野(2008)は、少年院内の少年の語り方を題材に、少年の自己を「管理」

するテクノロジーについて明らかにした。

ところで、少年院に収容される非行少年に注目すると、彼らは少年院外部から内部に参入し、再び外部に戻っていくというプロセスを経て生活空間を形成している。彼らは、少年院入院以前には逸脱行為を繰り返すことで、少年院で経験する、管理された生活とは異なった、日常生活を営んできたはずである。そうであるにも関わらず、少年院に収容されている少年たちは、管理された日常生活への適応を達成していく。

果たして少年院への適応は、いかにして可能であったのだろうか。そして、そのことは、退院後の少年にとって、どのような帰結をもたらすのだろうか。

このような問いを明らかにするためにも、本報告では少年院入院経験者が少年院における「管理」について、いかなる意味づけを行っていたのかについて問う。そのうえで、少年院における「管理」のテクノロジーについて、新たな視角を提示する。

3. 調査の概要

筆者は2011年7月より少年院入院経験者を対象に、半構造化面接の形式でインタビュー調査を行っている。

インタビューは、20代後半から30代前半の男性かつ有職者を対象にそれぞれ2時間程度実施した。いずれも1回のインタビューである。インタビューでは、少年院での経験を経て、いかにして現在の地位に辿り着いたのか、というそれぞれのストーリーが得られた。

ただし本報告では、少年が少年院の教育に対して行う意味づけについて明らかにすることを

課題として設定したため、インタビューデータのうち、少年院生活について聞き取った部分を主な分析対象とする。

4. 「置き換え」による適応—少年院による「管理」と非行仲間による「管理」の接合—

ここでは、少年院の「管理」に積極的に順応していたユウヤさんとカズさんの事例を挙げる。ユウヤさんとカズさんの語りで共通していたことは、少年院内での体育活動である「筋トレ」と学習活動である「勉強」に真面目に取り組んでいたということである。以下にはまず「筋トレ」に対する意味づけについて提示する。

ユウヤさんとカズさんは、少年院での「筋トレ」を、ケンカに負けない身体造りのために利用していたと語った。

またユウヤさんは、非行仲間が少年院から帰ってくるのを見て、「ごっつくなって帰ってきた」、「ちょっとしたことじゃ弱音吐かなくなるし、根性がついてくる」と感じたという。少年院入院経験は、非行仲間のうちで「ケンカに強そうな」心身の変革として経験されているようである。このことを踏まえると、少年院は非行仲間の間でも、「望ましい変容」の場としての解釈が共有されていたといえる。

次に、「勉強」に対する意味づけについてである。

ユウヤさんは、2 回目の少年院に収容されたときは、読書や日々の作業に熱中していたという。ただし、その動機については「真面目になろうとかじゃなくてもう、不良のエリートみたいなものになろうってのがあって(中略)ってかその、ほんとに悪い世界でずっと上がっていかうと思ったら、やっぱバカじゃ絶対上がっていけないんですよ。」と語った。

少年院の教育プログラムは、被収容者である少年がより「健全な」社会生活を送るために用意されており、社会で役に立つ能力の育成が求められている(法務省矯正局, 1993, p.135)。そして、ユウヤさんにとっても、少年院の教育は、

社会生活で役に立つためのプログラムとして経験されている。だが、ユウヤさんにとっての「社会生活」とは非行仲間集団における生活のことを指しているため、少年院は「不良のエリート」になるための能力生成の場として解釈されていた。

また、カズさんも「どうせ1年(少年院の中に)おるんだったら、なんか変わらな損だなあと思って。外におるやつも1年間成長しとるしー、1年中に入っとっても成長しんで時が止まっとったら追い抜かれちゃうじゃないすかやっぱり。」と語り、少年院で生活を送る自己と、外部社会で生活を送る非行仲間を比較していた。

これらの語りを踏まえると、非行少年にとって少年院とは、非行仲間との差異化を試みるための場として「置き換え」可能な場であると捉えることができる。

5. 結論

本報告を通して得られた知見は、少年および生活環境を「管理」するための少年院のテクノロジーは、少年が施設外部の非行仲間との関係を参照することで、強固に維持される側面がある、ということである。このことから、少年院教育は、少年が非行仲間うちでの経験と関連づけたときに、成立するのであり、したがって、少年院における「管理」は、施設外部の非行仲間によって成立している、といえる。

さらに、少年が非行仲間うちで共有された規範と少年院における「管理」の経験を接合させることで、少年院内で実践されている「管理」の枠組みが、外社会においても有効であると見ることができる。このように、少年院の教育による犯罪リスク削減のための「管理」は施設内部のみにおいて、少年に作用するのではなく、施設外部社会にも連続して少年および、非行仲間作用しているといえる。

※参考文献は発表当日、配布資料に示す。